

## 第9話

## 音楽と水～水琴窟序章～

中村 隆一

## 西洋の音と日本の音

音楽と水は両方とも私の好きなものです。音楽は昔から私の趣味で、特に西洋のクラシック音楽については長く関心を持ち続けて来ました。クラシックの中には曲名にタイトルを持った標題音楽というのがあります。その中には水の名前を持つている音楽というのがあります。そのような音楽をとおして西洋人が水をどのように捉えているかという話と水琴窟を作った日本人の音に対する感覚と両者の違いを話してみたいと思います。

次にいくつかの音楽を聴いてもらって、お話をしましょう。

## ヘンデル作曲

## 組曲「水上の音楽」

(レコード演奏)

今聴いて頂いた音楽は、ヘンデルの『水上の音楽』です。

ヘンデルはドイツ生れの作曲家で、ハノーバーと言う地方の国王に仕える音楽家でした。ヘンデルはオペラやオラトリオが得意で、遂にはヨーロッパの寵児にまでなりました。そしてイギリスに出て来ました。イギリスは、ハノーバーに比べれば社交の場としては大変良い所で、しかも当時すでに市民が音楽を聞くまでに成熟していた。そのためヘンデルは、大変お金持ちになりました。ところがイギリス国王が亡くなって、ハノーバーの国王がイギリスの国王になった。ヘンデルにとっては不運な事でした。ヘンデルはハノーバーの国王に仕えていたのに、そこがあきたらず飛び出したのですから。まさかこんな事になるなど夢にも考えていなかったのです。降って湧いたような事態です。そこでヘンデルは新しい国王が舟遊びをされている時にこの音楽を奏でて許しを乞うた。このような話がまことしやかに伝えられています。実はヘンデルは、国王がイギリスに来ると直ぐ仲直りしてこの音

楽はそれ以前に作られていた。ですからこれは後から作られたエピソードなのですが、それはそれとして、この音楽は水の上を音が響いて来る雰囲気が良く出ているというので現在でも広く愛好されています。これはハミルトン・ハーティという英国の指揮者が現代オーケストラ用にアレンジしたもので、原曲とは少し違っています。ロンドンのテムズ河の舟遊びの情景を表わしていると、いうのですが、これは標題音楽ではありませんで、純粋な器楽の合奏曲として聴くべきものです。

水と言えば、川や湖や泉などを表した曲が多いのですが、これらはそれにまつわる伝説や歴史譚などを物語るような叙事的な性格を持っています。多くは交響詩というジャンルに入るものが多いのです。

スマタナ作曲

交響詩「モルダウ」（わが祖国第二曲）

（レコード演奏）

清水が湧き出し、それがせせらぎとなり、小川になる。モルダウというのはドイツ読みですが、ボヘミア、今のチェコスロヴァキアを流れているエルベ河の支流です。河の流れの雰囲気が良く出ている。水そのものを描写しているのは最初の部分だけで、滔々と流れ出すと森や村、原野そしてプラハ

といった岸边の風景の描写になります。

ベートーヴェン作曲

交響曲第六番へ長調「田園」の第二楽章

（レコード演奏）

この曲はベートーヴェンのものとしては大変に変っていて標題音楽なのです。ベートーヴェンの交響曲には「運命」とか「英雄」といった名前の付いたものがありますが、これは後に他人が付けたニックネームのようなものです。この曲は、ベートーヴェン自身がプログラムを作って、それに合わせて曲を書いた純然たるプログラム・ミュージックです。これは第二楽章の「小川のはとりの情景」と題され、小川そのものよりも岸边の情景、カッコウなどの鳥の鳴き声も描写されています。まさに小川のはとりの情景を描いている、小川そのものでなくそれを眺める人の感情の表現なのです。人が見た時の感情です。

『モルダウ』は交響詩と言って、河の流れをそのまま物語のように音楽で綴っている。ヘンデルの『水上の音楽』は、たまたま水の上で演奏されたのみで、水は全く関係がない。

リスト作曲

エステ荘の噴水

（レコード演奏）

これはピアノ曲です。音楽史上最大のピアノの名人といわれたリストは、この曲でピアノのきらめくような高音を使って、水のしぶきやさざ波を巧みに描写しています。これは後のラヴェルに影響を与えています。

この次はドイツのリヒャルト・シュトラウス、第二次大戦直後まで生きていた後期ロマン派の作曲家ですが、管弦楽の使い方が上手で大変音楽の描写力に優れ、音楽でどんなものでも表現出来ると言っていた人です。

R・シュトラウス作曲  
アルプス交響曲

(レコード演奏)

彼はアルプスのガルミッシュ・バルテンキルヘンという所に別荘を持っていて、そこからまる一日かけて山に登って行く過程を音楽で表現したのです。長さ四十五分位ですが、途中で目に入る小川と滝、そういった所を描写した音楽、これを完全に音楽の力で描写しきっています。

レスピーギ作曲  
「ローマの噴水」

(レコード演奏)

この曲は、イタリア近代の作曲家レスピーギが、ローマの

風物に取材したローマ三部作（ローマの噴水、ローマの松、ローマの祭）のひとつですが、その中の第三曲「昼のトレヴィの噴水」、この噴水は俗に「愛の泉」といわれて、観光名所になっています。この曲はその噴水の情景を幻想的な雰囲気で描いています。

ここまでの音楽はヘンデルは別にして概ねロマン派の作曲家のもので、感情的情緒的に水をとらえ、それを情景的に描いた曲と言えるでしょう。従って対象が向こうにある。

ドビュッシー作曲  
水の反映  
オンディーヌ（水の精）

(レコード演奏)

今度はドビュッシーです。彼は水にちなんだ音楽を沢山書いています。ピアノ曲で『水の反映』と『オンディーヌ（水の精）』を続けて聞いて下さい。これらの曲は、水を感覚的に捉らえたものです。これらの曲は、一般に印象主義と言われ、ロマン派とは反対にある音楽です。現代ではこれさえロマン派だと主張する人もいますが、フランス近代のドビュッシーやラヴェルはそうは考えていない。ともかく感覚的に水を表している。これは割合日本人の水の捉らえ方に似ている所がある。音で水そのものを描いている。

日本人と西洋人の一番違う所は、日本人は水を表す場合、そのものになりきった感じで表して行く。ところが西洋の場合は対象を外側に置いて、それを自分の方の感情で捉えて表す。自然観の違いに由来すると思うのですが。従って西洋の音楽は、ものすごく能弁なのです。それが反省されてきてドビュッシーやラベルの印象主義の辺りから対象を突き放して見ると同時に、もののありようを描くというように変わって来ました。ラベルの『水の戯れ』と言う曲は宮城道雄に似ているようです。またドビュッシーの『雨の庭』などもそうだと思います。印象主義の人には水を表した曲が沢山あります。ドイツ系の音楽家の場合、必ず川や船或るいは波等を表す時、本人の感情が前に出てきた表現をする。ともかく音を厚手の絨毯のように織って表すのが外国の音楽である。あくまで自分が主体である。ところが日本人は、音を自然界に放り出してその音のありようを感覚的と言うか神秘的と言うか、そうした捉え方をしている。私は、そのように感じています。

宮城道雄作曲

水の変態

(レコード演奏)

西洋の音楽が、どちらかというところ、水そのものよりも、水の周辺の情景とか、船という介在物を通して描いているケ-

スが多いのですが、日本人の場合、武満徹が作曲した「ウォーターウェイズ」といった曲でも水そのものの流れが表わされている。

最後に宮城道雄の『水の変態』という琴の曲ですが、をお聴き下さい。高等小学読本という明治時代の教科書にあった詩につけた曲で霧、雲、雨、雪、あられ、露、そして最後に霜この水の七つの態様を水の変態と言っている訳です。

さて、それではそうした西洋人とは全く異なった水への感覚を持つ日本人が創り出した水琴窟に話を移していきたいと思えます。実は水琴窟に関しては、もっと詳しい調査をした後にと思っていたのですが、とりあえず序章ということで、現在までに解っていることを話したいと思えます。

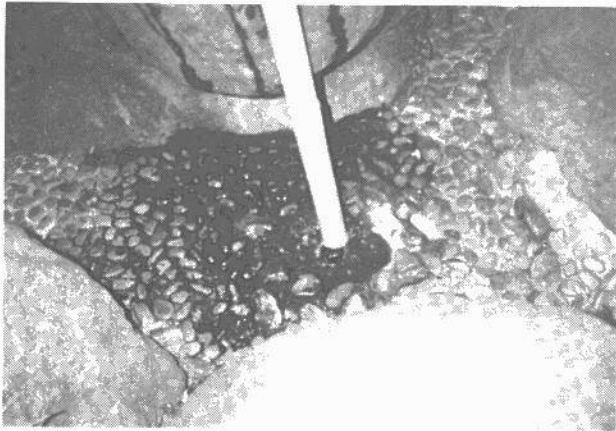
水琴窟の音とその印象

水琴窟という言葉は、最近まで百科事典にも出て来ません。昭和五八年に初めてその存在が知られるようになりました。

朝日新聞の東京版に『水の音色、江戸の風雅、旧吉田記念館で水琴窟発見』という記事が出たのが最初でしょう。その記事に注目して、天声人語が取り上げたのが昭和五八年の七月頃。しかしその時点ではいかなるものか知る人は極めて少なかったのです。品川の旧吉田邸というのは昭和二年に建てられた家で、さして旧くはありません。安田善次郎の甥の善助



(1) 手水鉢の側の水琴窟



(2) 水琴窟の窟口

写真 品川区品川歴史館に復元された水琴窟

という人が建てたものです。この人の在世中にはダルマ宰相として有名な高橋は清もこの屋敷に招かれたことがあるという事です。その後人手に渡って品川区がこの家を買いました。この家を訪ねたことのある人の口から、たしか水琴窟と言われる変わった仕掛けがあったと言う話が出て、庭を調べてみるようになりました。これが発掘・復元の起源です。

水琴窟は庭の手水鉢や蹲踞(つくばい)などの近くに瓶(甕)等を用いて小さな洞窟を作り、そのなかに水滴を落として、水音を洞窟の壁面に反響させて、地下に漏れてくる幽かな響きを楽しもうとする装置です(図一参照)これは日本庭園の趣きをより高めようとする技法であり、造園技術の最高傑作の一つであるといわれています。

私がこの水琴窟に注目するようになったのは三年あまり前、NHKの教育テレビで『二〇〇年の眠りから蘇る水琴窟』という番組を見た時からです。名古屋の放送局が制作したものでした。形としては手水鉢ですね。日本庭園には筧があつて、柄杓が置いてあつて、手を清める場所が昔からありました。

どうして今まで知られなかったのかと言うと、歴史的に有名な大きな庭園や中世の名園などには全くなかったのです。江戸時代の初期から中期にかけて江戸の庭師が商人の庭を作

るなかで、粋を凝らす、贅を尽くすという事で出てきたのではないかと思われます。武家社会の中で次第に実力をつけてきた商人たちが、目立たない形で贅をこらす。こうした遊び心を持った江戸文化の一つの現れではないかと思えます。

水琴窟は、『洞水門』と言ったものがその原形と考えられます。洞水門の名前の由来は全く分かりません。歴史的にも根拠というものが無いようです。ただ雪隠などから出てきて縁先の手水鉢で手を清める。ところが縁先でもありまた茶室の側でもあるので、水をただ捨てたままの状態にしておくはずい。このため排水機能としてこのような設備を考えただけではないか。そもそも最初はこのようにして洞水門で水を処理していた。構造は、図二のように瓶を逆さにして穴をあけ、この穴から水が流れ込み土に浸み込む。この土に浸み込む機能だけのために最初は作っていたのが、ある時音がするのに気が付いて、それから江戸時代の粋、わび、さび、こう言った風雅の方向に進んで行ったのではないかと考えられます。

疑問に感じた事は、手水鉢から水を受けて手を洗っても、地面が水びたしになるとか汚れるという事態になるのか、という事です。この辺りが一つの疑問点です。

茶会とか、句会とか人々が多勢集まる時に手水からも水が沢山流されるので、排水設備が必要になったのでしょうか。筧と獅子脅しの系列かなとも思えます。水が連続的に来て

単位：mm

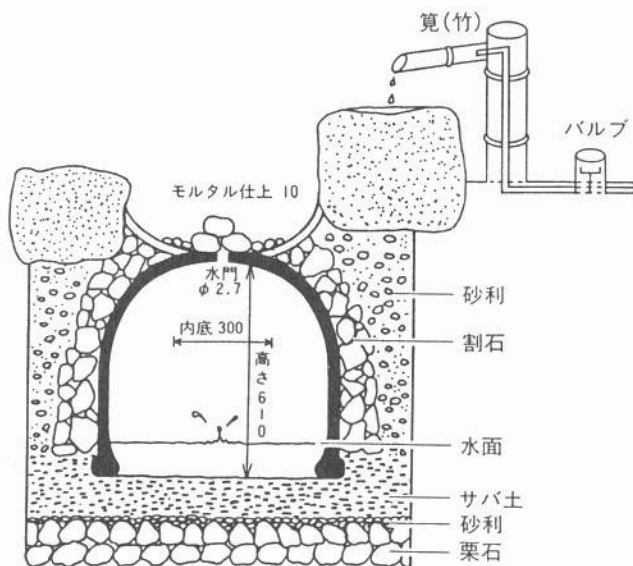


図-1 水琴窟断面図

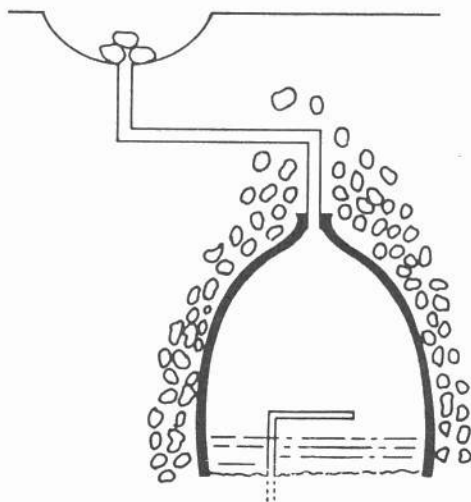


図-2 洞水門

いて、手を洗う事も出来るものとして作っているのであれば排水施設としての意味があるわけです。しかし水琴窟は、間欠的で量的にも少ないから、簡単に土に浸み込みます。ところがわざわざ水琴窟あるいはその前身の洞水門を作った。この意味がはっきりとは分からない。この施設は武家の屋敷などには全く無いのです。一覧表を御覧下さい。この表は、完全なものではありませんが、この表を纏めた『日本の音研究所』というのは、愛知県の庭師さん達のうち水琴窟に関心を持っている人達の同好会です。ですからこの表は中部、近畿辺りだけなのですが…。

旧吉田邸で発見される前、文化財として有名だったようですが、鳥取県東伯郡羽合町の尾崎邸、これは国指定の名勝になっていますが、ここに水琴窟があったのです。これは比較的古いと言われていますが、詳しくは分かりません。研究者にも分からなくて、江戸の中期から昭和の戦前頃まで続いた風雅の境地の一つではないかと考えられています。戦後全く顧みられず、それが品川歴史館の建設に際してやっと蘇生した。いかなる起源を持つのか、どのような流れで水琴窟となったのか、それは全く分からないのです。庭師の話では、江戸を中心とした庭師の間でしか知られていなかったとのことです。どのような音か、聞いて頂きましょう。現代では、ちよつとあり得ない音です。流水音と滴水音を組み合わせる鑑賞

## 日本全国『水琴窟』一覧

日本の音研究所  
昭和62年8月1日現在

\*日本の音研究所により発見確認されたもの

所在地	種類	製作年代
1. 愛知県吉良吉田町宝珠院	縁先手水鉢	大正末期、昭和初期移築
2. 愛知県立田村原信一邸	縁先手水鉢	昭和初期(要修復)
3. 福井県三国町宮大旅館	雷隠手水鉢	江戸天明時代
4. 福井県三国町田中金物店	中庭縁先手水鉢	昭和初期
5. 京都市北区中村正治邸	中庭縁先手水鉢	昭和初期
6. 京都市右京区西村光治邸	庭園つくばい(伏せ鉢皿)	現代
7. 京都市伏見区菟原庭	庭園下りつくばい	明治末期
8. 三重県員井郡東興町円光寺	縁先手水鉢	明治中期
9. 三重県鈴鹿市松林秀重邸	縁先手水鉢	明治末期(要修復)
10. 三重県伊勢市船谷精一邸	縁先手水鉢(二個所)	明治初期
11. 三重県一志郡白山町杉本文夫邸	縁先手水鉢(二個所)	(未確認)
12. 岐阜県美濃市多井商店	茶室つくばい(伏せ鉢)	明治末期(復元)
13. 岐阜県可児市千村邸	書院縁先手水鉢	江戸中期(修復)
14. 岐阜県高山市野島力邸	縁先手水鉢	明治中期
15. 岐阜県御酒町酒井正之助邸	縁先手水鉢	明治末期
16. 岐阜県川辺町大雄寺	縁先手水鉢	大正13年
17. 岐阜県酸欠市大龍寺	縁先手水鉢	大正初期(要修復)
18. 岐阜県恵那郡浅井邸	縁先手水鉢	江戸中期(未確認)
19. 名古屋市長和区高木邸	縁先手水鉢	昭和初期
20. 名古屋市中区小寺邸	縁先手水鉢	江戸中期(修復)
21. 名古屋市長和区山口正美邸	縁先手水鉢	昭和9年
22. 名古屋市長和区藤田ちよ邸	縁先手水鉢	昭和10年(要修復)
23. 名古屋市長和区愛生医院	縁先手水鉢	明治30年
24. 名古屋市長和区外村邸	縁先手水鉢	昭和11年
25. 名古屋市長和区樋口乱	縁先手水鉢	(未確認)
26. 名古屋市長和区長崎邸	縁先手水鉢	昭和初期
27. 名古屋市長和区鈴木邸	縁先手水鉢	昭和初期
28. 名古屋市長和区竹田邸	茶室つくばい	昭和35年頃
29. 大山市天王前田中邸	縁先手水鉢	江戸後期
30. 愛知県海部郡黒川邸	縁先手水鉢	江戸中期



するわけです。水は、寛から手水鉢に送ってきて、手水鉢から溢れ、小石の並べてある所に溜まり、逆さの瓶の中に落ちる。しばらくすると底の方に或る程度水が溜まって来る。底には、ぐり石と砂利で土台が作ってある。そして水をあるといど溜めつつ、徐々に浸透させる。水量が少なくなると上からポツン、ポツンと落ちるわけです。これは美濃市の今井邸の水琴窟の音です。

この音は、水の音というより、水滴が落ちて瓶の壁面に共鳴して出てくる音です。ですから水の音より金属的な音です。かなり強烈で六二ホーンという事です。もっとも穴の口の所ですが。一種の環境音的な捉え方だったので無いでしょうか。手を清めることで音が発生し、その音でより清められるという境地ではないでしょうか。そんな感じがしなくもありません。

この水琴窟が考案された当時は、現代からはとても考えられないような静寂があったということ、それから広大な武家屋敷や神社の庭と違って、比較的狭い商家の庭だからこそ、音を楽しむことができたと思うんです。

### 討論

谷口 音を楽しむより静けさを楽しむという要素が強かったのではないか。静けさを強調するために逆に音を出すとは

考えられないか。

中村 禪がそうだとはいえますね。鈴木大拙の影響を受けたアメリカの作曲家でジョン・ケージは、「四分三秒」という曲で音をたてないで、ピアノの前に座ってその間に聞こえてくる外界の音を聞けと言うのです。ただそれに比べると水琴窟の音は連続音なんです。

この音を愛でようというので、常滑焼きで壺を作って、細い竹で壺の中に水を張り、反響音を楽しむ壺中琴というものが作られています。

小野 昔どこかで聞いたような音だなどと思って聞きました。田舎にいた時、水瓶の水が少なくなった時なにかの拍子にこんな音がしていたようです。

石丸 水琴窟の良い音色を出す最も大切なことは、適度な水滴を作る事ではないか。これは大変難しい事に思えます。

中村 その通りでして、入口の穴を相当工夫しているようですね。試行錯誤でやったようですが、穴が大きくても小さくてもいけないわけです。

稲場 洞水門が水琴窟より古いわけですが、この場合水滴が入るルートが複雑になっています。中村さんは、最初浸透が主で、やがて音に気が付いて次第に発展したと言われました。ところが音だけを考えると、洞水門でも音は出ている。

外に伝わってくる度合いは少ないけれど、壺の中の音は、洞水門でも水琴窟でも変わらない。むしろ洞水門の場合、音の外に抜けないだけ中での音は大きい可能性がある。

中村 洞水門は土被りが深いから、中で響かない可能性がありますが。

稲場 音が出ていると考えた時、その音を誰が聞くのかと言う事が問題ではないだろうか。誰がと言うと、人間かこの世の者でない者か、どちらかと言うことになります。洞水門の場合、後者の者がより大きな音として聞いているのではないか。例えば賛美歌は誰のために歌っているのか、お経は誰のために唱えているのか。もし目に見えない者のためにこの音を出していたのであれば、洞水門の方が原理になつていゝるのではないか。ところがこの原理がやがて稀薄になつて人間が楽しむようになったのではないだろうか。

鍾乳洞の中で水滴が落ちる場合このような音がするのではないか。つまり地の中の音なのでは。洞窟の奥で水滴が落ちる音は、地の底の音なんです。もっと飛躍して言えば、底の国、根の国の音なんです。無機的な世界の音なんです。そう言う音は人間が聞く必要はないのであって、根の国の人が聞くのではないのでしょうか。水琴窟はある意味で、少し墮落したもののようには思えますね。

ただ浸み込ませるだけであれば、このように複雑なものを

作る必要はないように思われます。何故このように複雑でなければならなかったのか。それが問題です。

浸み込ませるだけでなく、音が必要だった。しかもその音は人間に聞かせるための音ではなかった、このように考えますね。アジアのある国では、穀物をつくると曰と杵があたかも音楽を奏でたように鳴る、そのように作られているというところを読んだ事があります。それは感謝の心を神様に伝え、これからもお恵下さいと祈るためです。人間が聞くためではないのです。

中村 しかしそれはどちらかと言えば原始社会でのこと。水琴窟は江戸の町人文化なんです。やはり遊び心からきたものではないかと思えます。洞水門も中世以前にはないのです。稲場 もともと中国や朝鮮のものかもしれません。東アジアにはないのか。調べてみたいですね。

谷口 賛美歌には教育的要素や連帯意識を育てるといった目的もあつたのではないか。ただ単に神のためということでもないように思います。時間とともに芸術として鑑賞するようになったことは事実ですが。

稲場 それにしても神社にないのはどうしてだろう。

中村 商家の茶室の前や雪隠の前に限られているようですからね。

谷口 でも直感的にこの瓶からお墓を想像させるものはあ

りますね。

石丸 たしかに埋葬した状態を思わせますね。折口信夫の『死者の書』に水滴がシトシトと落ちてくるといった描写があります。なんとなく地中の死者とからめた水の音を連想させなくもないな。水琴窟は、江戸時代に風雅の表現として発展したのかもしれないが、それから連想されるものとしては宗教的な日本人の昔からの地中への思念と音に対する観念がありますね。

中村 簡単に風雅の方に走るのにもたしかに問題がありますね。私もある面では理解出来ません。

稲場 汚れた水で出した音は汚れているのではないだろうか。手を洗った水、それは汚れているはずです。汚れた音が風雅の対象となるだろうか。

中村 音によって浄化されていくと言うことではないだろうか。そうすると浄化が目的か。音によって浄化している。洞水門というのは岐阜県の加美市にある春秋園の書院の縁先手水鉢、この一箇所だけで、排水装置として完全なものだそうですね。もちろん音は小さい。音を楽しむものではない。ともかく音で清めている、こう考えることが良いようだ。そうすると『みそぎ、はらい』だね。

(昭和六三年一月一七日)